

V 写真撮影について

1 カメラの設定等のヒント

- 使用カメラはデジタルカメラを推奨する。
- 通常の印刷用であればカメラの画素数は500万画素あれば十分である。
- カメラの設定は基本フルオートでよいが、実際の葉色と写真の葉色が異なる場合は以下の撮影設定メニューの変更を試みる。
- ホワイトバランス（白いものを白く写す機能）はオートでよい場合が多いが蛍光灯下やガラス越しの光ではホワイトバランスのモードを変更して撮影するとより実際の色合いに近いことがある。
- 露出（カメラに入る光の量）をアンダーにすると明るすぎない写真が撮影できる。その分シャッタースピードが速くなる。
- ISO感度を高くするとシャッタースピードは速くなるがノイズ（写真のざらつき）が多くなる。
- ズームレンズは広角にしすぎると歪みが大きくなる。
- 絞りが調節可能なカメラであれば絞り値を大きくして被写界深度（ピントを合わせた前後のピントが合う範囲）を確保する。絞り優先モードでの撮影がよい。

2 撮影時の注意点

- 極カストロボ撮影はしない。被写体との距離が近いため、ストロボ撮影をすると反射光を避けられず実際の色合いが表現できない。
- 手ぶれに注意する。固定せずに撮影できるシャッタースピードは30分の1秒程度までなので暗い場合は三脚、一脚等で手ぶれを防止する。三脚を使用してセルフタイマーモードで撮影するとシャッターを押したときのぶれがない。
- ピントは確実に合わせる。
- 写真のバックは青系の布がよい。ブルーシート等の光沢があるものは反射がある。
- 発芽時の写真はポット内の土壌が暗いことから、葉色が実際と違って写ることがある。そのようなときはホワイトバランスを調整する。
- クローズアップの写真は何がポイントかわかるように撮影角度や構図を工夫する。

3 発芽時の写真撮影

- 発芽後5～7日の写真を撮影する。撮影時期の目安は標準区の子葉が展開し本葉が現れる前までがよい。この頃に供試試料等の試験区の発芽が遅れている場合は数日後に再度撮影する。
- 発芽の状態が異常である場合はクローズアップ写真を撮影する。
- 発芽時の全体写真は真上から撮影する。各試験区から4ポットを抽出（計8ポット）して撮影する。
- ポットは写真の例のように配置し、各ポットの間隔は試験終了時の撮影を考慮して、広めにするとよい。こまつな株の縦横のラインを揃えると見栄えがよい。
- 試験区等のラベルは6写真の例に準じる。
- 被写体との距離が近いと写真の左右が歪むので極力歪まないように被写体との距離とズームを決定する。

4 試験終了時の写真撮影

- ・試験終了時に写真を撮影する。収量調査（葉長測定）をする前に撮影するとこまつなの生育状態が変わらず傷みがない。
- ・異常症状がある場合はクローズアップ写真を撮影する。
- ・試験終了時の全体写真は真上から撮影する。各試験区から4ポットを抽出(計8ポット)して撮影する。
- ・ポットは写真の例のように配置し、各ポットの間隔は発芽時の写真と同じとする。
- ・試験区等のラベルは「6 写真の例」に準じる。
- ・被写体との距離が近いと写真の左右が歪むので歪まないように被写体との距離とズームを決定する。

5 試験中の写真撮影

- ・試験中に異常症状を発見した場合は直ちに写真撮影を行う。異常症状の進行状況がわかるような写真撮影を心がける。
- ・写真は考察する際の資料となる。

6 写真の例

発芽時の全体写真



試験終了時の全体写真

